

判例構造コンパス

判例を「事実・論点・判断経路・結論」の構造として比較する研究

Judgment Structure Compass | Research Overview Version 1.0

研究・開発	FANDDF
研究着手日（確認可能な基礎資料上）	2026年7月18日
基礎資料初出	2026年7月18日
基礎資料	OpenAI Build Week 提出用 Step 4 デモ期待動作・機能受入条件書／正式条件書
初期基礎資料 Version	Version 2.1 - Version 4.2
研究概要初版	2026年8月18日

本研究概要について

本ページは、FANDDF が研究・開発を進めている「判例構造コンパス」について、その研究背景、基本的な考え方、開発方法、検証経過および現在の到達点を公開可能な範囲でまとめたものです。

判例構造コンパスには、判決文の構造化、原文との照合、監査、データベース登録、比較方法などについて詳細な内部仕様がありますが、本ページではそれらをそのまま公開するのではなく、何を課題と考え、どのような方法で解決しようとしているのかを中心に説明します。

研究・開発は現在も継続しており、方法や監査体系の改善に応じて本研究概要も Version 単位で更新します。

1. 研究の背景

判例を調べる場合、一般的には事件名、法律名、争点、キーワードなどから関連する判例を検索します。

近年では生成 AI を使って判決文を要約したり、複数の判例を比較したりすることも可能になっています。

しかし、ここには一つの問題があります。

文章や使われている言葉が似ていることと、裁判所の判断の仕方が似ていることは、必ずしも同じではありません。

例えば、二つの事件で「仕様変更」「納期遅延」「追加作業」という同じ言葉が使われていたとしても、

- 仕様変更が遅延の主な原因だったのか
- 複数ある原因の一つだったのか
- 遅延した後に仕様変更が発生したのか
- 別の原因が介在していたのか
- そもそも法的に拘束力のある納期だったのか

によって、裁判所がたどる判断経路は大きく異なります。

判例構造コンパスは、この違いを扱うために研究を開始しました。

初期の正式条件書でも、本システムは文章や単語の一致率を提示するものではなく、事件内容、法的論点、判決判断構造を比較することを目的として設計されています。

2. 研究目的

本研究の中心的な目的は、判例を単なる文章として扱うのではなく、

事実

→ **論点**

→ **判断材料**

→ **判断経路**

→ **結論**

という構造として捉え、異なる事件間で比較できるようにすることです。

裁判所が、

- どの事実を認定したのか
- どの証拠を判断材料としたのか
- どの法的論点について判断したのか
- どの事実をどの要件へ当てはめたのか
- どの判断を経て結論へ至ったのか

を構造として保持することで、文章表現が違う判例についても、判断上の共通点や相違点を確認できるのではないか、というのが基本的な研究仮説です。

したがって、判例構造コンパスが目指しているのは、

「文章が似た判例を探すこと」ではなく、「判断の構造が比較できる判例を探すこと」

です。

3. 判例をどのように構造として捉えるか

判決文には、さまざまな情報が混在しています。

例えば、

- 当事者が主張した内容
- 相手方が反論した内容
- 裁判所が認定した事実
- 採用された証拠
- 法的な判断規範

- 個別事実へのあてはめ
- 中間的な判断
- 論点ごとの結論
- 最終的な結論

などです。

判例構造コンパスでは、これらを同じ文章として一括処理するのではなく、それぞれの役割を分けて扱います。

概念的には、次のような構造になります。

判決原文

↓

当事者・契約・出来事

↓

請求・抗弁・論点

↓

証拠・認定事実・判断規範

↓

あてはめ・中間判断

↓

論点別結論

↓

判断経路

さらに、それぞれの要素がどのような関係で結ばれているのかを保持します。

この「要素」と「要素間の関係」を使って、裁判所が結論に至るまでの判断経路を表現します。

4. 単語ではなく「関係を持った比較単位」で見る

研究初期には、判決文から抽出した個々の要素や関係をどのように比較するかが大きな課題となりました。

例えば、

「仕様変更があった」

という事実だけを比較しても、その意味は十分には分かりません。

重要なのは、

誰が変更したのか

いつ変更したのか

何を変更したのか

その変更が何に影響したのか

裁判所がその事実をどのように評価したのか

まで含めた関係です。

そこで、個々の単語やノードをそのまま比較するのではなく、主体、時期、因果関係、法的機能などを保持した「**関係付き比較単位**」として扱う方法を採用しました。

V4.2 では、この比較単位を構造比較の重要な単位とし、同じ意味を複数回数えないための二重計上防止や、比較単位の粒度を検証する仕組みも設けています。

5. 原文へ戻れることを重視する

判例を構造化する際に、FANDDF が重視している原則があります。

それは、

「**構造化された情報が、判決原文のどこに基づいているのかを確認できること**」

です。

AI やプログラムが、

「この判例では、この事実が重要である」

と出力したとしても、それだけでは正式な構造とは扱いません。

構造化された重要な要素について、

- どの原資料か
- 何ページか
- どの原文に基づくのか
- どの構造要素と対応しているのか

を追跡できる状態にします。

このため、判例構造コンパスでは `source_span` という考え方を採用しています。

原文との対応を確認できない情報については、推測で補完して正式な検索・比較対象へ進めないことを基本としています。

6. 構造化しただけでは正式データにしない

判例構造コンパスでは、

「AI やプログラムで構造を作れた」 = 「その構造が正しい」

とは考えていません。

そのため、構造候補を生成した後に監査工程を設けています。

研究の進展に伴い、監査体系は次の7段階へ整理されました。

1. 原文追跡監査

構造化された内容が判決原文へ正しく戻れるか確認する。

2. 文書境界・発言主体監査

当事者の主張と裁判所の判断などを混同していないか確認する。

3. ノード意味監査

一つ一つの構造要素が、原文の意味と一致しているか確認する。

4. 論点对応監査

各要素が正しい請求・抗弁・争点と結び付いているか確認する。

5. 判断経路監査

要素同士のつながりが、実際の裁判所の判断関係を再現しているか確認する。

6. 判断経路充足監査

主要な判断経路に欠落や不自然な孤立がないか確認する。

7. 判例側数値モデル構築適格性監査

数値化を行う場合に、その前提条件を本当に満たしているか確認する。

監査後には、どの用途まで利用可能なのかを能力別に判定します。

7. 「分からないものを、分かったことにしない」

本研究で重要になった考え方の一つが、**未確定状態を許容すること**です。

判決文から明確に確認できない関係について、AIが自然に見える論理を補ってしまえば、一見きれいな判断構造を作ることができます。

しかし、それでは裁判所が実際に行った判断と、AIが補った判断とを区別できなくなります。

初期実証でも、原文からAND、OR、NOTなどの論理演算を確定できなかった関係については、値を埋めずnullとして保持しました。

同様に、

- 原文から確認できない
- 判断主体を確定できない
- 比較単位の粒度に疑義がある
- 数値化に必要な前提がそろっていない

場合には、無理に正解として扱わず、未解決状態として保持します。

この考え方は、その後の監査体系や実行制御にも引き継がれています。

8. 研究・開発の経過

判例構造コンパスは、最初から現在の構造で完成していたわけではありません。

実際の判例へ適用し、問題を発見し、その結果を仕様へ戻す形で Version を更新してきました。

V4.2 — 判断構造比較の基本方式を整理

V4.2 では、判例を文章一致ではなく構造として比較するため、

- 関係付き比較単位
- 二重計上防止
- 比較単位の粒度
- 判断構造を表す軸
- 数値化可能性の区分
- 独立監査
- 算定できない場合の停止

などを体系化しました。

case_01・case_03 への初期適用では、正式 DB を新規構築した後、必要な DB 項目や Schema の不足、一意制約・多重度の問題などが実データ登録前に発見されました。

問題を回避するために別の場所へデータを押し込むのではなく、一度処理を止め、DB と Schema そのものを修正しています。

case_01・case_03 による実証

実判例を用いた検証では、独立監査、差分確認、修正、再監査を繰り返しました。

その結果、case_01・case_03 について、

- 判断構造のノード：85 件
- エッジ：66 件
- 関係付き比較単位：20 件
- 有効化された規則：7 件

まで整理されました。

一方で、数値 weight を生成する工程では、必要な論理関係や特性関数などが十分に確定していないことが確認されました。

そのため、数値を無理に生成するのではなく、数値化を停止し、20 件の比較単位を使った**非数値構造比較**へ切り替えました。

この非数値方式を用いたローカル実働デモでは、最終的に 505 件のテストがすべて成功しています。

V1.5 系 — 構造を「信頼して使えるか」を監査する体系へ

研究が進むにつれて、単に判例を構造化するだけではなく、

その構造を正式な検索・比較データとして利用してよいか

を判断する必要性が大きくなりました。

V1.5 系では、

- 構造生成の来歴
- 原文との一致
- 発言主体
- ノードの意味
- 論点との対応
- 判断経路
- 判断経路の充足
- 利用可能な範囲

を段階的に管理する監査体系へ発展しています。

V1.5.10 — 仕様を実行する前の統制へ

さらに V1.5.10 では、構造化や監査の中身だけでなく、仕様そのものを実行してよいかを事前に確認する考え方まで拡張しました。

仕様に必要な実装が存在しない場合や、必要条件が確認できない場合に、

「目的は同じだから、この方法で代用しよう」

と AI や実装側が独自判断して進めることを防ぐためです。

そのため、仕様書の処理へ入る前に固定された前提条件を確認し、条件が満たされない場合は実行しない仕組みを設けました。仕様書に記載されていない独自補完や、別の判断式による実行許可の生成も禁止しています。

9. 実証から分かったこと

研究・開発を通じて、いくつかの重要なことが分かってきました。

文章を構造へ変換するだけでは足りない

ノードやエッジを作ること自体はできます。

しかし、

- 誰の発言なのか
- どの論点に属するのか
- どこまでを一つの比較単位とするのか
- 原文上、本当にその関係が成立しているのか

まで確認しなければ、比較可能な判断構造にはなりません。

DBの構造そのものが研究結果に影響する

初期開発では、必要な列が存在しているだけでは不十分であることも分かりました。

一意制約、多重度、版管理などが適切でなければ、本来複数存在する判断要素を正しく保存できません。

実判例を登録する前にこの問題を発見し、全 60 テーブルの多重度・制約を再監査しています。

数値を出せることと、数値を出してよいことは違う

技術的に数値化できても、その数値が判決原文から説明できなければ正式な指標として使うべきではありません。

実際の検証でも、数値化の前提が不足していたため算定を停止し、非数値比較へ切り替えました。

これは研究上の失敗ではなく、説明できない数値を出さないための設計判断です。

10. 現在の位置づけ

判例構造コンパスは、法律判断を AI へ代替させるためのシステムではありません。

また、勝訴可能性や判決結果を予測することを目的としたものでもありません。

研究の対象としているのは、

裁判所が実際に行った判断を、その根拠と判断経路を失わない形で構造化し、異なる事件間で比較可能にすること

です。

初期正式条件書でも、本システムの指標は法的正解率、勝訴可能性、判決予測を意味しないことを明確にしています。

現在も、判例の構造化方法、監査方法、比較方法、データベースへの正式登録方法について継続して検証を行い、Version を更新しています。

11. 今後の研究

判例構造コンパスでは、今後も、

- 判断構造の精度向上
- 新規判例への適用
- 監査方法の改善
- 判断経路の比較方法
- 未解決情報の扱い
- 人による確認負担と精度の両立
- 異なる法領域への適用可能性

などを検証していきます。

同時に、この研究で扱っている、

情報

→ 判断材料

→ 判断基準

→ 判断経路

→ 結論

という構造は、必ずしも法務分野だけのものではありません。

企業の商品開発、営業、採用、業務改善、顧客対応などにも、人が複数の情報をもとに判断し、結論を出す過程があります。

判例構造コンパスは、判例を対象とした研究であると同時に、**人が行った判断を構造として保存し、検証・比較・再利用するための方法論を研究する先行事例**として位置づけています。

12. 結論

判例構造コンパスが目指しているのは、AI に法律判断をさせることではありません。

人が行った判断を、単なる文章として消費するのではなく、

何を事実として認識し、

何を論点とし、

何を判断材料として使い、

どのような経路を通して、

どの結論へ至ったのか。

その過程を、原文へ戻って確認できる形で構造として残すことです。

そして、その構造を異なる事件間で比較できるようにする。

これが、判例構造コンパスの研究の中心です。

研究開発ステータス

継続研究・検証中

本研究概要は、研究・開発の進展に応じて Version 単位で更新します。

更新履歴

Version 1.0 | 2026 年 8 月 18 日

初版。研究背景、研究目的、判断構造化の基本思想、原文追跡、監査体系、主要な開発経過および現在の位置づけを公開版研究概要として整理。

© FANDDF. All Rights Reserved.

本ページに掲載する研究概要、図表および構成内容の無断転載・複製・再配布を禁止します。